青少年くらしき
家庭版
発行
倉敷市教育委員会
編集
生涯学習課
☎ 426-3845

11月

「学びながら子育て」前編

令和五年六月一七日に、倉敷市地域子育て拠点　ひろばわたぼうし主催で実施した子育て講演会の要旨を二回に分けてお届けします。講師は、神戸大学名誉教授の広木克行（ひろき・かつゆき）先生です。

●情報化社会と超競争社会

こんにちは。今日は、コロナ禍で明確になった、子どもたちの育ちと子育てについてお話しします。

ニュースでは、不登校の子どもが二十四万人とか、いじめが六十一万件超とか、最も悲しいことに、子どもの自殺が五百人を超えた、などと報じられています。「それらの問題の原因はコロナだ」とする意見には、注意が必要だと思っていました。もちろん、間違いではないですが、私は「コロナにより、現代社会の問題点がより明確になった」という捉え方が大事だと思います。今は、情報化社会で競争が激しくなり、将来や生活が見通しにくい社会になっていると思います。かつては、男性は仕事をし、女性は家で家事や育児をする性別の役割分担がありました。ただ、現代では、男性も女性も仕事を持つ人が多く、仕事を巡る競争は、厳しくなっています。現代では、社会の急激な変化により、子育ても生活も非常に難しいものになっています。

●仕事と子育てのはざまで

私は、子育て・不登校・いじめなどの講演会や相談会で話をしています。仕事を持つ、あるお母さんが言いました。

「子育てが上手くいかず投げ出したくなる。わからないことが多くて、辛く苦しい」

こうして、仕事と子育ての間で葛藤する母親がいます。私は、不安や悩みを誰にも言えない母親たちが、自分の本音・思いを吐き出せる場所があるといいと、本当に思っています。悩みを吐き出せれば、子どもへ優しい表情や言葉がかけられるのではないかと思うからです。

「子育ては母親」というイメージが、日本の社会ではまだ強いです。「女性は母性があるから子育てがうまくいくはず」と、安易に考えているところがあります。子育てに母性は必要ですが、人間は誰にでも、「母性」と「父性」が備わっています。

つまり、今日の社会の子育ては母親だけの問題ではないと、本当に真剣に考える必要があると思うんです。

中高一貫校に通う中学一年生の男子が、七月から不登校になり、両親で相談に来ました。これは素晴らしいことです。両親が同じ話を聞き、夫婦で話し合うことができると、問題はより早く解決するのです。

お父さんは「良かれと思って、常に先手を打ってやらせてきた。きっと、息子は、うちの中でも充電できなかったんだと思う」と言いました。

その後、彼は、転校しましたが、家から出られなくなり、ゲームにのめり込みました。両親は、私の本も読み「今は学校に戻すより、しっかり休ませよう」と話し合ったそうです。その内に、子どもに笑顔が出てきた、と報告がありました。

父親は、「厳しさを見直すことにした」と言い、母親も、「不登校は本当に辛かったけど、おかげで、夫婦が話し合うようになった。私は仕事優先だったが、見直さなければいけない」と言いました。

この子にとっては、両親こそが頼りです。息子のために学び、話し合ってくれる両親は本当に素晴らしいです。解決は簡単ではありませんが、一緒に悩みながら、道筋を相談していきましょうと話しました。

仕事が充実する一方、子育ては上手くいかない。そんな中、自分の気持ちを正直に相談してくれた。こういうケースは、両親が自ら学び、正直に話すことで、子どもとの関係を作り変えていけます。子どもは、育ち直しの名人ですが、変わるのに最も大切なのは人的な環境です。両親が気付いて自ら変わると、子どもも確実に変わります。それは本当に不思議ですが、事実です。

●幼児期の発達とマスクの影響

さて、コロナが明確にした問題を考えるうちに、保育士は、子どもたちの育ちの問題点をつかんでいることに気付きました。マスクなしで保育していると、子どもたちは、保育士の顔を、不思議なものを見るように、じっと見つめているそうです。かつてはそんなことはなかったのに。これは、とても大事な問題の発見です。

二〇二〇年六月の朝日新聞に「感染防止、保育の現場は　マスク姿　見えぬ表情」という記事が載りました。保育士たちが「マス

ク保育で表情が伝わらない。発達に影響はないのか」と心配する内容です。

新生児期から幼児期の子どもは、表情と言葉をセットにして、深く脳の奥に刻みつけていきますが、それができない場合、子どもたちの育ちにどういう影響があるのか、保育士は、とても心配していました。

記事には、「笑顔で安心させたいが、マスクが表情を隠してしまう。子どもは、相手の表情を読み取り、思いを理解する。顔の半分が隠れた大人との生活は、子どもにとっていかに不安が大きいか実感する」とあります。まだ一歳の子どもは、言葉が理解できない部分もあり、保育士の気持ちを表情から感じ取るしかない。感染対策が緩和された今、マスクを外して子どもに話し掛けると、保育士の顔をじっと見つめてる。表情の動きを初めて見るわけです。言葉と表情とまなざしの三点セットにより、メッセージが届き、理解する。その最適時期に、それができないことは何を意味するのか。子どもは育ち直しの名人ですが、子どもたちの育ちに本当に大事で、一歳二歳に体験すべきことが、追体験で身につくのか。マスクの問題は、多くの子どもに影響を与えていると考える必要があります。

倉敷市立真備東中学校　２年　服部慶
（令和４年度）
「竹林」（水墨画）
竹の葉が重なる所は、前後をわかりやすくするために間を空けて描いた。竹の光沢を出すために、墨の濃さを変えて描いた。

●非認知機能のベースとなる触覚体験

もう一つ、大事なのは「触覚体験」。物に触れることも、コロナ禍で禁止されてきました。物に触れる、匂いをかぐ、音を聞く。大事な触覚体験が制限されてしまった。触覚体験と、表情を見る体験の両方が少なくなり、子どもたちの発達に影響が出ています。保育士たちは、言葉が増えないなどの様子を、子どもたちに感じるようです。

触覚経験と音を聞く経験、例えば犬に触れて「わんちゃん」と言うのを聞くと、犬のイメージが、触覚と音で刺激されて、言葉として定着します。今の子どもには、表情を見て、目を見てゆっくり話すことが大事です。そうすれば、少し遅れることはあっても、子どもがちゃんと育ち直してその力を回復することができます。

発達への影響を説明する論文があります。「コロナ禍が子どもの脳と心に及ぼす影響」（京都大 明和教授）です。「二〇二一年、米国ブラウン大学の調査で、パンデミック期間に生まれた子どもの認知機能（学習時に重要な機能で、言語機能、計算機能、判断力など）は、それ以前に生まれた子どもより、二二％程度低下していることがわかった」。日本はマスクをしない米国でも、認知機能の低下が証明されました。

乳幼児期の子どもの発達で一番大事なのは、非認知機能です。言葉、見る、触れるの三点をセットにして物事に関わり、脳の機能が形成されていく。これが乳幼児期の学びです。非認知機能が土台となって、認知機能も形成されます。でも今、土台より前に、英語や習い事をさせることが増えています。この影響がみられるのは、十年以上先ですが、そのときの対応は非常に難しいです。

私自身の相談から、ある男子中学生の例を紹介します。成績優秀ですが、中一で不登校になり、自分を責め、傷つけ、とても苦しみ、やがて、両親に言いました。

「寝るときに、僕の足にお母さんたちの足を乗せてほしい。そうしないと、どこかに飛んでいってしまいそうだ。僕は空っぽだ」

言葉はいっぱい知っているから試験はできる。でも、中身がないと言う。乳幼児期に、物に触れ、匂いをかぎ、見て、話して覚える。沢山の体験により、非認知機能を獲得していると、それをベースに、言葉を覚え、想像力豊かな人間になっていきます。大人の表情から、感情を察して付き合う力は、幼児期に目を見、言葉を聞き、表情を読む経験を通して、身についていきます。

非認知機能が最も育つ時期には、様々な実物に触れるのが大事です。同じ感触ばかりでは、非認知機能のベースになる触覚体験になりません。なぜ、触覚を強調するのか。触覚は、触覚・味覚・嗅覚・視覚・聴覚の五感が育つ上で、一番大事だからです。元々残りの四つは、触覚から分かれて発達しました。単細胞生物は、触覚だけで生きています。母なる器官は、触覚なのです。

五感が発達していると、より多くの情報に接することができます。触覚体験を基にして他の感覚器官が豊かに成長していく時期が、まさに乳幼児期です。

先程の男子は、中学受験のため、友達と遊ぶことなく勉強してきたそうです。賢い子に育ったと思ったのに、不登校になり、「僕は空っぽだ」と言い始めた。お母さんは驚きました。これは一つの例ですが、このような子どもたちは、決して少なくないのです。（続く）

（文責 中村麻希子）